

屋上緑化のある家が子供たちにとっての“住みたい家”となるように

筒井 公一（筒井公一建築研究室 一級建築士事務所）



20年ほど前のことだったと思います。建築関連の学会の催しで「子供が描く自分の住みたい家」というテーマの展示がありました。一見、色々な家が描かれているように見えたのですが、一つ大きな特徴が読み取れました。それは子供達自身が現実に住んでいる家が「自分の住みたい家」として描かれていることでした。子供達にとっては家族と暮らす生活の場が、大人が思う以上にかけがえのない大切な場として捉えられ、それゆえに自分達の家を「自分の住みたい家」として描いたのかもしれません。

そう考えると当然のことかもしれませんが、展示にはいわゆる家のイメージに加えて、一戸建てやマンションの間取り図が「住みたい家」として描かれていました。大人の世界同様、子供が家を考える時にも70㎡、3LDKといった数字や経済性が一種の常識として子供の世界に反映されていることに驚きを覚えました。

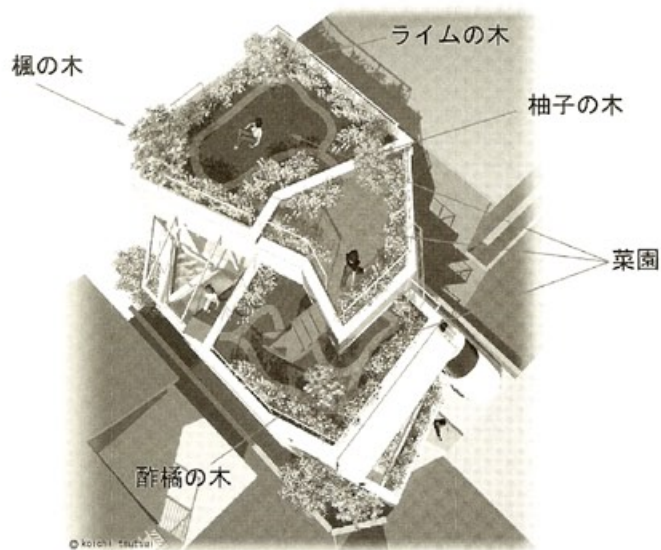
それから約20年、家を取り巻く常識は変わってきたように思います。奇しくも屋上開発研究会が創立されて20周年。

その間、経済性・合理性の迫りから自然環境との共生へ「エコ」、「リサイクル」といった地球温暖化への対策が一般化されはじめ、法令が徐々に整備されてきた20年であり、スカイフロントコーディネーターという新たな職能の誕生もそうした時代の流れに呼応するものだと思います。

私のスカイフロントコーディネーターとしての夢は、子供達の描く「自分の住みたい家」の屋上が緑で覆われていくことです。家が家族の繋がりであることと同様、屋上緑化は地球温暖化対策の一つであり、エコロジーを実践することで家と地球を繋げる重要な手段でもあります。屋上緑化が新たな常識として社会に定着することにより、子供達が描く家にも緑に覆われた屋上のイメージが必ず現れてくると思います。そんな夢の実現に向けて、スカイフロントコーディネーターとしての職能の追求に努めています。

■屋上緑化事例

都市近郊の3階建てが多く見られる住宅地における屋上緑化計画。スキップフロアの建物構成により屋上部分も段々畑状の緑化となった。土壌の厚さを30cmとし、菜園、柑橘系の果樹、そして楓の紅葉が楽しめる屋上緑化とした。



計画名称：Cardiac House(心臓の家)
主要用途：住宅
計画地：埼玉県川越市
規模・構造：鉄骨造3階建て、延べ床面積 139.47㎡、
建築面積 62.16㎡

